



甲虫ニュース

No. 101

COLEOPTERISTS' NEWS

March 1993



ヒゲコガネの畸型

黒沢良彦

過日、猪又敏男氏より神奈川県産のヒゲコガネ *Polyphylla laticollis* LEWIS, 1887 を12頭ばかり頂戴したが、その中に興味のある異常を示す個体が1頭含まれていたのを、記録しておく。

1♂, 神奈川県高座郡寒川町相模川畔, 30. vii. 1988, 鳥羽明彦採集 (Fig. 1-1).

相模川に架かる内沢橋の灯火に飛来したものであ

るが、写真に示した通り、左触角の鯉状部の長さが右触角に較べると異常に短く、そのほぼ半分の長さしかない。その状態は中国の西南部からインドシナ半島を経てマレー半島中部の高地にかけて分布する *Polyphylla tonkinensis* DE WAILLY, 1945 (Fig. 1-5, 6) の雄の触角によく似ている。しかし、雌 (Fig. 1-3) よりははるかに長く、明らかに雄の触角と考えら

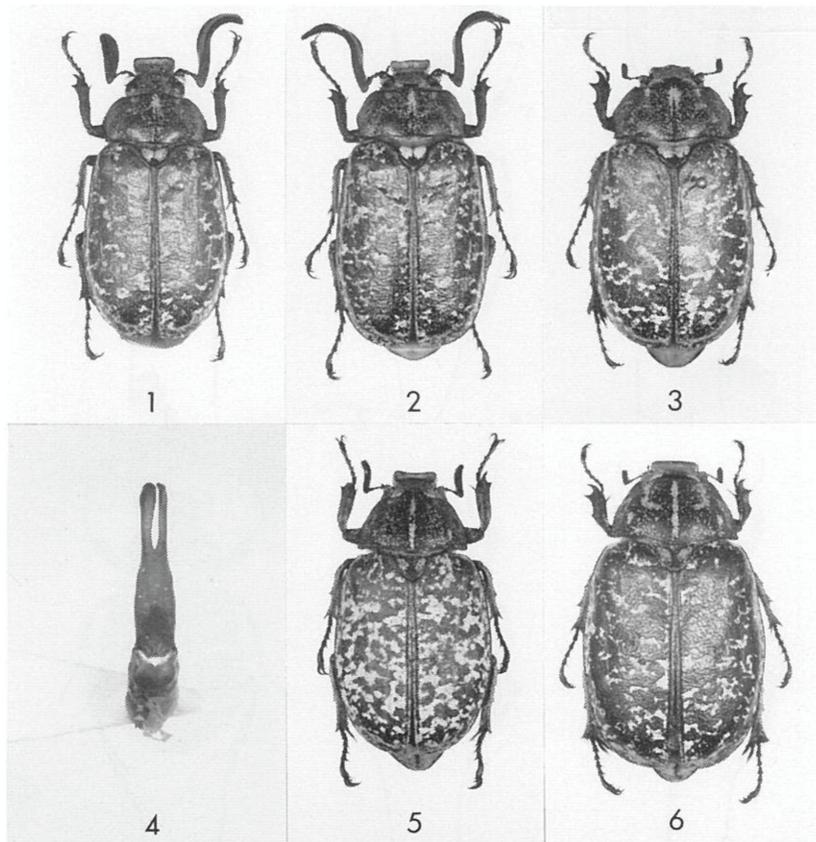


Fig. 1. 1~4: ヒゲコガネ *Polyphylla laticollis*, 1, 嵌合体♂, 2, 正常型♂, 3, 正常型♀, 4, 嵌合体♂交尾器; 5~6: *P. tonkinensis*, 5, ♂, 6, ♀.

れる。さらによく調べてみると、体の左側が右側に較べて発育が多少悪く、多少細くて短く、肢も附節や脛節が右肢よりも左肢の方がやや短い。腹部も左側（腹面から見ると右側）が右側よりも発育が悪いために、上方に多少引き吊ったようになっている。従って、尾節板も左側にゆがんでいる。さらに興味があるのは、交尾器 (Fig. 1-4) で、もち論雄の交尾器であるが、左右で形が異なり、右半分（写真では左）は正常な形をしているが左半分はいちじるしく瘦形で、左右ともに左半分と同様の対称的な形をしていれば当然ヒゲコガネとは別種と見做されるであろうほどの相異がある。

以上の諸点から考察すると、この個体は雄であることは間違いないが、右半分は正常の雄であるのに左半分は間性 (intersex) の雄で、両者が完全に左右半分ずつに分けて現れた嵌合体ではないかと考えられる。

ここで思い出すのは、甲虫ニュース6号 (1969. vi) で私が報告したコフキコガネの「雌雄型」のことである¹⁾。この時は実物標本を検することなく、岩合徳光氏の撮影された写真にだけ基づいて雌雄型と

して報告したが、今回のヒゲコガネを検した眼で当時の写真を見直してみると、このコフキコガネの触角も、左側は完全な雄であるのに、右側の鰓状部は左側の鰓状部の半分長さしかないが、雌のそれよりは明らかに長いと思われる。どうやらこのコフキコガネも雌雄型ではなく、正常の雄と間性の雄の左右半分ずつの嵌合体ではなかったかと考えられるが、実物標本が残っていないのでこれ以上の断を下すことが出来ないのは残念である。

なお、この短い鰓状部を持った間性のヒゲコガネは、左右の嵌合体ではなく両触角が共に短い真の間性の個体も当然現れるであろうと推定されるが、いまだにそのような標本に接したことがない。この場合、短角の *tonkinensis* との関係も当然問題になるであろう。

追記

1988年秋に上掲の報文の原稿を作製したが、その後になって上記の標本の左半分が「間性」であるという考え方に疑問をいただき、以来4年間も原稿を机上に放置することになった。しかし、今年 (1992)

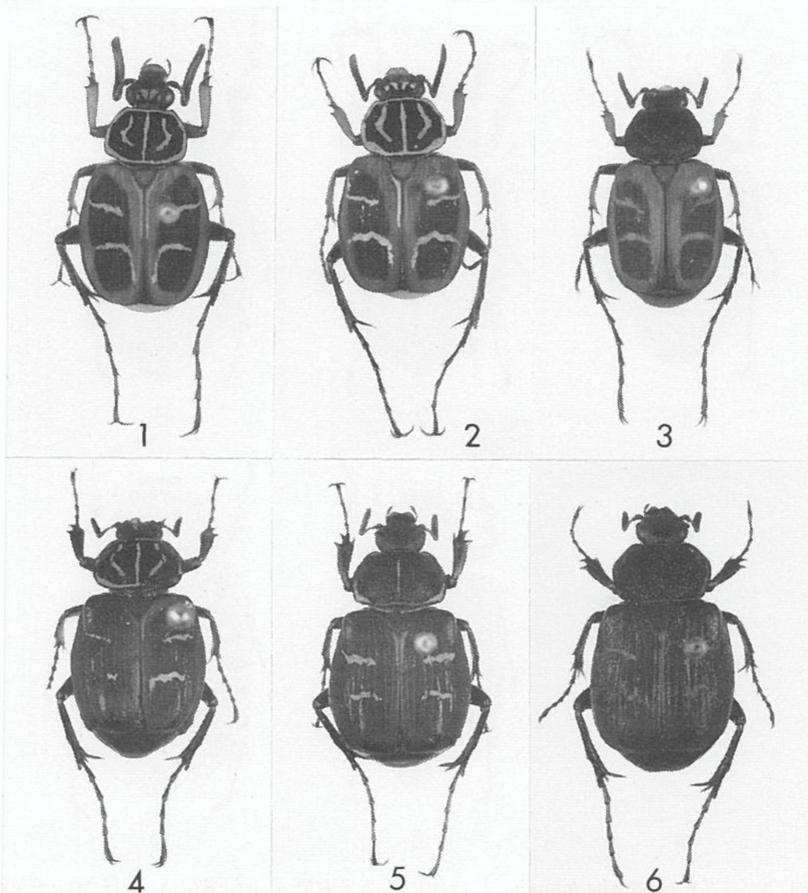


Fig. 2. オオトラフハナムグリ *Paratrichius doenitzi*: 1, 正常型 ♂, 2-3, 間性 ♂, 4-5, 間性 ♀, 6, 正常型 ♀.

8月7日付けの朝日新聞の朝刊社会面に、大阪で発見されたクマゼミの「雌雄型」が報ぜられたので、それに関連して上記のヒゲコガネを記録しておく必要があると思ひ再び筆を執ることにした。

上に記したヒゲコガネ *Polyphylla laticollis* LEWIS, 1887 は右が正常の雄、左が「間性」の雄の雄同士の左右嵌合体であると考えられるのに、私が1969年に報告したコフキコガネ *Melolontha japonica* BURMEISTER, 1855 は恐らくは左が正常の雄、右が「間性」の雄でやはり雄同士の嵌合体であると推定される。

一方、同じコガネムシ科ではあるが、オオトラフハナムグリ *Paratrachius doenitzii* (HAROLD, 1879) では、触角の鰓状部の長さに、通常の雄と通常の雌との間に種々の段階の間性が現れる (Fig. 2-1~6) が、そのうえ雌雄の斑紋が混在するモザイク型もよく現れる。しかし、今回ヒゲコガネに現れたような正常な雄と「間性」の雄との左右の嵌合体を見たことはないしその存在も聞いたことはない。

甲虫ではないが、今回朝日新聞紙上で報ぜられたクマゼミ *Cryptotympana facialis* (WALKER, 1858) は腹部の外観は完全な産卵管を具えた雌であるが、左腹弁はよく発達した雄型で、左側の体と翅が雄型に近く大きい。そのためにこの個体はクマゼミの雌雄型と見做された。

一方、私は1958年にエゾゼミ *Tibicen japonicus* (KATO, 1925) に現れた「畸型」について報告している²⁾。この個体は、外観は雌で産卵管も完全であるが、右腹弁は雄型であるが正常の雄に較べると一廻り小さく発達が悪い。それでも明らかに雄型で、体の右側と右翅がわずかに大きく、雄の形質を現しているかと思われる。当時私は雄型の腹弁の発達が悪く腹部が雌型であるためにこの個体を雌雄型とはせず畸型として報告した。

これら2例の蟬では、発現部が左右異りはするものの、腹部は完全な雌で産卵管も完全であるが、左

右どちらかの腹弁が雄型で、さらにその側は雄の形質を帯びると云う点で共通している。従って、両者の異常は同じ機構によって惹起されたもの見做してよいであろう。

さらに、上掲のヒゲコガネとコフキコガネの例では、左右のどちらかが正常の雄で、他方が間性の雄である。エゾゼミの場合も雄の腹弁は発達が悪く完全な雄型ではないので、これも間性と見做してよいであろう。すると、クマゼミの左腹弁は限りなく正常型に近い間性の雄と考えることが出来る。従って、ヒゲコガネなどの「畸型」も蟬における「雌雄型」もそれぞれ異なった機構によって現れたものではなく、同様の機構で現れたものと見做すことが出来るであろう。この場合、ヒゲコガネとコフキコガネの場合には、本来は雄となるはずであるのに、左右どちらかの側に主として触角などの第二次性徴の発達を阻害する負の力が働いたものと考えられる。逆にエゾゼミやクマゼミでは、本来は雌となるはずの所に負の力が働いて片側のみ雄の形質が現れたと見る事が出来るであろう。私の知るの上記4例だけであるから断定は出来ないが、ヒゲコガネやコフキコガネなどの属するコフキコガネ族 *Melolonthini* では正常の雄と間性の雄との嵌合体に、エゾゼミやクマゼミの属するエゾゼミ族 *Tibicenini* では正常の雌と間性の雄との嵌合体になるのではないかと思われる。オオトラフハナムグリの場合にはこの負の力がどちらかの側に片寄ることなく体全体に作用すると考えてよいであろう。この負の力が何であるのか、仔細に調べたわけではないので断定することは出来ないが、私は遺伝子や染色体の異常によるものではなく、性ホルモンの分泌異常によるものではないかと思っている。この点将来の研究に期待する。

最後になってしまったが、貴重な標本のご恩恵を賜ったうえに、素晴らしい写真を撮影して頂いた猪又敏男氏に深甚の感謝を捧げる。(東京都世田谷区)

- 1) 黒沢良彦, 1969. コフキコガネの雌雄型, 甲虫ニュース, (6): 1.
- 2) 黒沢良彦, 1958. エゾゼミの畸型, 自然科学と博物館, 25: 133.

○緑島(台湾)のアオムネスジタマムシ

緑島(旧名火烧島)は蘭嶼(旧名紅頭嶼)と共に台湾の南東沖にある小島で、台東県台東市のほぼ真東、約30kmの沖合にある。ソナンカタゾウなど蘭嶼と共通するカタゾウ類4種、特産のカショウトウカタゾウとゴマフニセカタゾウなど台湾本島には見られないフィリピン系のゾウムシを産することで有名であるが、蘭嶼には5種類もの特産のタマムシを産するの、緑島からは不思議にも1種のタマムシの記録もない。

大阪府茨木市の谷角素彦氏は数回同島を訪れ、下記のタマムシを採集し、その調査を私に委ねられたので、その結果を記録しておく。貴重な標本を委託

された同氏に深謝する。

アオムネスジタマムシ *Chrysodema manillarum* THOMSON, 1879, 3♂♂3♀♀, 台湾台東県緑島, 22.vii.1990, 谷角素彦採集。

八重山諸島や与那国島産の同種に較べると、背面は明らかに暗色であるのに体下は明るい金緑色で、肢はより強く赤味を帯びる。一見蘭嶼における本種の代置種のヤスマツムネスジタマムシ *C. yasumatsui* Y. KUROSAWA, 1954 に似た色彩を帯びるが、形態はアオムネスジタマムシに一致する。本種はフィリピンから台湾の南端をかすめ琉球列島にかけて広く分布しかなりの地域的な変化がある。さらにインドネシアからニューギニアを経てソロモン諸島

にかけて近似した多くの種類が記載されているので、将来その検討が進めば、あるいは種名が変更されるかも知れない。(東京都世田谷区、黒沢良彦)
○三浦半島、神武寺の堆葉層から得られたゾウムシ類

落葉から得られるゾウムシは、本来落葉中に生息しているもの、夏眠や越冬のため落葉中に入るもの、また地面すれすれの枯れ枝などにいて偶然落ちたもの、幼虫や蛹が土中にいて羽化したてのものなどがある。

筆者は、1990年6月から11月に神奈川県逗子市神武寺のアカガシ林の堆葉層から得られたゾウムシを検査する機会を得たので記録しておく。採集者はすべて東京農大の漆原ひろみ女史で、落葉をツルグレン装置にかけて採集したものである。

1. *Mylocherus griseus* ROELOFS カシワクチブトゾウムシ 2頭, 8. vi. 1990.

カシワ、ナラなどの広葉樹葉上から普通に採集される。冬期には越冬中の個体が落葉中からよく得られる。

2. *Asphalmus japonicus* SHARP ホソヒメカタゾウムシ 3頭, 8. vi. 1990.

落葉中に生息する種で地域ごとに多数の種に分けられる可能性がある。

3. *Trachyphloeosoma setosum* WOLLASTON ケシツチゾウムシ 1頭, 18. xi. 1990; 2頭, 8. vi. 1990; 1頭, 17. xi. 1990.

土壌中より普通に得られ、落葉中にも生息する。

4. *Lissorhoptrus oryzophilus* KUSCHEL イネミズゾウムシ 1頭, 17. xi. 1990.

冬期には越冬中の個体が落葉中から得られる。

5. *Anthonomus okumai* MORIMOTO et MIYAKAWA オオクマハナゾウムシ 5頭, 22. ix. 1990; 1頭, 8. vi. 1990; 3頭, 17. viii. 1990; 2頭, 20. x. 1990; 2頭, 17. xi. 1990.

本州では5~6月にクリ、コナラの花から採集されているが寄主植物ははっきりわかっていない。

今回採集された個体は、夏眠や越冬中の個体と思われる。

6. *Bradybatus limbatus* ROELOFS ヘリアカナガハナゾウムシ 2頭, 22. ix. 1990.

冬眠中の個体と思われる。ヨーロッパに分布する本属の種の成虫は、すべてカエデ科の植物より得られる。

7. *Simuratacalles simulator* (ROELOFS) ヒサゴクチカクシゾウムシ 1頭, 18. vii. 1990.

この属の種は、地面すれすれの枯木からよく採集される。そのため落葉中からも得られる。

8. *Simuratacalles watanabei* MORIMOTO et MIYAKAWA ワタナベヒサゴクチカクシゾウムシ 2頭, 22. xi. 1990; 1頭, 17. xi. 1990; 1頭, 8. vi. 1990; 1頭, 18. vii. 1990.

1985年に伊豆諸島(神津島, 伊豆大島, 式根島, 三宅島, 御蔵島, 八丈島, 青ヶ島, 利島)から記載され、雄

は知られていない。本州からは初記録と思われる。

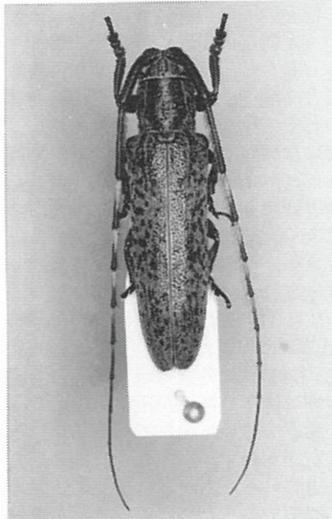
末筆ながら貴重な標本を提供して下さった漆原ひろみ女史に感謝する。

(九州大学農学部昆虫学教室, 小島弘昭)

○八重山諸島小浜島におけるカスリドウボソカミキリの採集記録

八重山諸島西表島の東方に位置する小浜島におけるカミキリムシの記録は少なく、筆者の調べた限りでは武田(1988)による5種類が知られているにすぎない。筆者はこれに記録されていないカスリドウボソカミキリ *Pothyne variegata yayeyamana* BREUNING et OHBAYASHI を次のとおり採集しているので報告する。

1頭, 沖縄県八重山郡小浜島, 24. v. 1992.



ツルの絡まった低灌木のピーティングで得た。本種(亜種)は八重山諸島ではすでに石垣島, 西表島, 竹富島などから記録があり、小浜島の分布も当然と考えられるが、最近出版された「日本産カミキリムシ検索図説」にも分布地としての記述が無く、これまで未記録であったものと思われる。

参考文献

武田雅志, 1988. 月刊むし, (214): 26.
大林延夫, 佐藤正孝, 小島圭三編, 1992. 日本産カミキリムシ検索図説. 東海大学出版会.

(東京都大田区, 酒井 香)

○福島県から採集されたクリイロツヤハダコメツキの記録

クリイロツヤハダコメツキ *Elathous brunneus* (LEWIS, 1894) は、1881年にNikkoでLEWIS自身によって採集された2個体の標本に基づいて *Limonius* 属の種として命名記載されたものである。本種は記載以来90年以上も採集された記録がなく、その正体についてもまったく不明であったが、最近になって大平(1985), 鈴木(1987), 渡辺(1987)により

検討がなされ、ようやくその分類学的位置が明らかにされた。

本種はこれまでに、原記載の日光の他、愛媛県(ナラバラ山)、岡山県(真庭郡)から知られているが、採集記録はきわめて少なく、その他の地域の記録はない。筆者は川田一之氏採集の東北のコメツキムシ標本の中から、本種の雄を見いだしたのでここに新産地として記録しておきたい。

1♂, 福島県南会津郡新田原, 24. vii. 1982, 川田一之氏採集。

生態については、不明な点が多いが、夜間活動性で灯火に集まること、雄に比べ、雌の採集例が少ないこと、採集月が夏期に集中していることが知られている。

大平(1992)が静岡県水窪町から *Harminathous suturalis* (CANDÈZE) フトツヤハダコメツキとして記録した雄個体(3. viii. 1986)は、その写真から判断すると本種ではないかと思われる。

参考文献

大平仁夫, 1992. 静岡県水窪町のコメツキムシ. 三河の昆虫, (39): 350-351.
 鈴木 互, 1987. 日本地域におけるコメツキムシ科の分類学的覚書(I). 甲虫ニュース, (75/76): 1-8.
 渡辺昭彦, 1987. 105年目に再発見されたコメツキムシ. 月刊むし, (195): 20-21.
 ————1990. 岡山県のコメツキムシ追録 IV. すずむし, (124): 8-10.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○キタヤマメダカハネカクシの知床山地での記録

キタヤマメダカハネカクシ *Stenus mammops* CASEY は、シベリアと北アメリカから知られていた種で、NAOMI (1988) が利尻島から記録したことによって日本のファウナに加えられた。保田(1990)は本種を朝日町天塩岳の高山帯から記録し、北海道本島から初記録であるとした。筆者は本種を知床峠で採集しているので、国内における第三の産地として記録しておきたい。

5頭, 北海道斜里町知床峠(約700m), 3. viii. 1989, 芳賀馨採集, 直海俊一郎同定・所蔵。

知床横断道路の側溝から拾った。周辺の環境はハイマツ林で、微地形的に沢になった部分には矮小化したダケカンバが生育していた。



末筆ながら、本種を同定して下さり発表を勧められた直海俊一郎博士および文献の入手に便宜を図って下さった鎌倉正人氏に心からお礼申し上げます。

参考文献

NAOMI, S.-I., 1988. Studies on the subfamily Steninae (Coleoptera, Oxyporidae) from Japan III. New or little known species of the subgenus *Nestus* of the genus *Stenus* LATREILLE. *Proc. Japn. Soc. syst. Zool.*, 38: 43-50.
 保田信紀, 1990. 天塩岳で採集した甲虫類. 士別市立博物館報告, (8): 35-41.

(神奈川県川崎市, 芳賀 馨)

◇例会報告◇

1992年第4回例会を12月20日(日)午後1:30より、東京上野・国立科学博物館4階の実験講義室で行ないました。今回の講演は3題で、渡辺泰明氏(東京農大)による「中国雲南省における日中合同土壌動物調査」、ならびに大林延夫氏(神奈川県園芸芸試)による「北ヴェトナム探訪談」は、多数のスライドにより両地の風光風物や昆虫が紹介され興味をひきました。少憩後の相場博明氏(慶應義塾幼稚舎)による「東京近郊より発見された甲虫類の化石群集」は、現地の状況や出土昆虫に加えて精密な図が多数映写され、例会では初めての化石甲虫に関する講演であることから多大の関心を呼びました(別掲の要旨参照)。参加者45名(例会担当, 笠原須磨生)

例会講演要旨

東京近郊より発見された甲虫類の化石群集

相場博明(慶應義塾幼稚舎)

東京都西部を流域とする多摩川及び北浅川の河床に分布する地層中より、大量の甲虫類の化石を発見した。

産出地点は多摩川より2カ所、北浅川から2カ所、そのうち3カ所は前期更新世上総層群中からのものであり、産出標本数は75点、甲虫類14種が識別できた。残り1カ所は後期更新世(炭化木片の¹⁴C絶対年代の測定値は約3万5千年前を示す)中からの物であり、産出標本数は2000点以上に及び、現在まで110種の甲虫類が識別出来ている。

第4紀の甲虫化石については野尻湖のものがよく知られているが、関東地方では質、量ともに他に類を見ない規模のものである。

内容は、オサムシ科44種、コガネムシ科20種、ゲンゴロウ科5種、ガムシ科8種、ミズスマシ科1種、エンマムシ科2種、クワガタムシ科1種、ハネカクシ科10種、シテムシ科1種、コメツキムシ科8種、ゾウムシ科5種、テントウムシ科1種、ハムシ科6種、その他所属不明10種と多岐にわたる。

特に興味深いものとして、現在の関東地方にはほぼ見られない、ホソツヤナガゴミムシ *Abacetus leucotelus* BATES, ヒラタアオコガネ *Anomala octiescostata* BURMEISTER, チビクワガタ *Figulus bi-*

nodulus WATERHOUSE, カツラネクイハムシ *Donacia katsurai* KIMOTO などがあり, また本土からは絶滅したと思われるヒメダイコクコガネ *Copris tripartitus* WATERHOUSE の産出も見られた.

およそ第4紀の昆虫は現生種と種レベルで一致するという考え方が一般的だが, 今回産出したものの中には形態的に現生種とは若干異なると思われるものも含まれており, 今後さらに詳細な検討が必要である.

計 報

本学会名誉会員の馬場金太郎先生が亡くなりました。平成5年1月6日午後4時30分との事で、正に痛恨の極みである。

誰もが知っている様に、先生はこよなく虫を愛し、虫の世界の神秘を探求してこられた。先生は折々に話されたり、書かれたりした事柄をまとめて昭和44年に「虫きち」と題する本を出版されたが、この題名は先生御自身を端的に表現したものであろう。虫が好きと同時に先生は虫好きの人間が大好きだった。学会などの折には、虫好きの人達を誘っては酒席を設け、虫談に花を咲かせた。そして、プロとアマチュアとを問わず、虫の研究に携わっている人達に対してあらゆる面で惜しみない援助の手を差し伸べられた。特に、ご自身の採集された多くの標本を専門家の手にゆだねられたが、それらの標本に基づいて書かれた論文の数は枚挙にいとまがないほどであると同時に、この事を通して多くの専門家が育って行った。本学会や多くの本学会会員も先生から多大の恩恵を受けてきたのは勿論の事である。

一方、現在の日本は自然環境の破壊に伴う悪影響が色々な面で噴出し、大きな社会問題となっているが、古くから先生は自然の大切さを説かれ、自然保護の必要性を訴え実践してこられた。この事を思えば、先生が亡くなられた事は虫にかかわる人達ばかりでなく、広く日本にとって大きな損失と言わねばならない。今後は私達も先生のご意志を帯しつつ真摯に自然と語り合う活動を続けて行かねばと思いを新たにする必要があろう。それにしても今後は学会などの席で、温和ながらも大声で談笑される先生に接することができない事は何とも淋しい限りである。心から先生のご冥福を祈る次第である。

(渡辺泰明)

◆追悼号原稿の募集◆

次号(第102号)を故馬場金太郎先生の追悼号として企画しましたので、原稿を会員の皆様から広く募集します。内容は、馬場先生ゆかりの甲虫の解説あるいは紹介、これまでに先生より研究材料の提供を受けられておられる方々はその報告、また、先生に纏わる思い出やエピソード(400字詰原稿用紙2~3枚)などを、4月末日までに下記へお送りくだ

さい。

〒278 野田市堤台 438-32 久保田正秀宛

◇会員動静◇

◎新入会

安達元裕(東京都大田区)、古田 治(飯田市)、浜路久徳(泊江市)、波多野良次(弘前市)、伊藤研(川崎市中野区)、川瀬英夫(津市)、小室大輔(金沢市)、近 雅博(京都市左京区・京大理)、V. KUZNETSOV (Vladivostok, RUSSIA)、李 春霜(中華民国・台北市・国立台湾大)、宮下公範(江別市)、長岡浩子(東京都文京区・自然環境研究セ)、中村剛之(福岡市東区)、葦沢幸世(東京都世田谷区・東京農大昆虫)、酒井哲弥(鯖江市)、榊原陽一(東京都世田谷区・日大林学)、佐藤陽路樹(東京都世田谷区)、澤田 博(金沢市)、柴多浩一(帯広市)、A. SMETANA (Ottawa, CANADA)、高橋 誠(酒田市)、高野 勉(つくば市)、武田 昭(新潟県柏屋郡須恵町)、田中 稔(西宮市)、土橋秀行(東京都練馬区)、敦見和徳(宇都宮市)、八木下 潤(八王子市)、山本博子(堺市)、山崎一夫(大阪市阿倍野区)、吉江敏雄(宮城県柴田郡柴田町)

◎再入会

伊藤 武、亀澤 洋、分島徹人

◎会員種別変更

小宮次郎(一般会員から賛助会員へ)

◎退会

林 好則、水城利光、森川春男、中山裕人、小倉健夫、嵯峨裕之、佐藤雅夫、島本龍一、高倉康男、玉置真司

◎認定退会

安倍信明、江村 薫、竹内克豊、塚本恵介

◎死去

馬場金太郎、加藤 昇、桐生 亮、水戸野武夫
今年から、会員動静は簡略化して掲載することになりました。(庶務担当、岩田隆太郎)

◇日本鞘翅学会第5回大会報告◇

1992年11月22日(日)、13時より日本鞘翅学会第5回大会が東京上野・国立科学博物館2号館4階階段講義室にて開催された。

I. 総会

上野俊一会長の挨拶に始まり、議長(露木副会長)選出に続き、庶務担当から拡大幹事会の提案として、上野俊一会長の任期満了に伴い、渡辺泰明氏が次期会長に推挙された。その他の幹事・編集委員の新任・交替等若干の異動案、会計担当からの会計報告、編集担当、他の幹事からの当年の会務報告や次年(1993年)の予定などが提出され、満場一致で承認された(1993年からの新スタッフ一覧、1992年会計報告はそれぞれ7頁、8頁参照)。休憩後、下記の講演に移った。

II. 招待講演

大倉正文氏(日本甲虫学会会長・神戸市東灘区)
「戦後の甲虫研究の歴史」

主として関西における戦前からの甲虫研究の動

向、少年時代の昆虫採集への傾倒や思い出を交え、河野 洋氏・後藤光男氏・伊賀正汎氏との出会いが紹介された。また大阪市城北公園にあった「植物と昆虫の会」から甲虫に興味を持つ同好者が集い、「関西昆虫学会」を基盤にして、戦後間もない1946年に「近畿甲虫同好会」が創立され、その機関誌として「近畿甲虫同好会会報」が創刊され、1948年には中根・黒沢・林・大林・三島の諸氏によって「虫の友の会」から「昆虫学評論」が創刊されたが、そういったいきさつが比較的多く残っていることが明らかにされた。現在地球規模で開発が進められ、広大な自然環境が変貌し、それに伴いそこに棲息している小さな虫たちが失われてはいる現状に際し、未来への遺産としてこのような標本を保存することの必要性が示唆された。

会場からの質問に答える中、戦災によって多くの貴重な標本が失われてはいるが、関西は関東に比べて個人の採集標本が比較的多く残っていることが明らかにされた。現在地球規模で開発が進められ、広大な自然環境が変貌し、それに伴いそこに棲息している小さな虫たちが失われてはいる現状に際し、未来への遺産としてこのような標本を保存することの必要性が示唆された。

III. 一般講演

一般講演として次の講演2題が行なわれた(要旨は下記)。

(1) 宮野伸也・山口 剛(千葉県立中央博)・笠原須磨生(日本理科美術協会)「絶滅危惧種キロホソゴミムシの生態」

(2) 齊藤秀生(自然環境研究センター)・宮下徳子((株)地球工作所)「ワルサワダケヒメハナカミキリについて」

IV. 標本同定会・懇親会

恒例の標本同定会が、歓談を交えて行なわれた後、大会は17時に解散。この後科博本館食堂において、遠来の大倉正文氏・佐々治寛之氏なども交えて懇親会が盛大にとり行なわれた。

(大会担当、中村俊彦; 庶務担当、岩田隆太郎)

一般講演要旨

(1) 絶滅危惧種キロホソゴミムシの生態

宮野伸也^o・山口 剛(千葉県立中央博)・笠原須磨生(日本理科美術協会)

キロホソゴミムシは、環境庁編「日本の絶滅のおそれのある野生動物」において絶滅危惧種に指定され、現在千葉県の小櫃川河口域にのみ生息が知られる貴重な種である。演者らは1991年から本種の生態の調査を開始し、初めて本種の幼虫を明らかにするなど若干の知見を得た。

本種は年一化で、越冬した成虫は3月末から4月初めに活動を開始する。越冬はオギの落葉下で行われる。雌の卵巣は5月頃から発達を始め、6月初めまで産卵が行われる。飼育状態で見られた産卵は、オギの枯れ枝中に行われた。幼虫は6月初め頃から孵化し、卵期間は約1週間である。幼虫の形態は同属のアオホソゴミムシの幼虫によく似たものであっ

た。幼虫は3齢を経過し、6月末頃から粘土質の土中に浅く(3~5cm程度)潜り、長楕円体の蛹室を作り蛹化する。蛹期間は約1週間である。新成虫はオギの落葉下で生活し、そのまま越冬に入る。

(2) ワルサワダケヒメハナカミキリについて

齊藤秀生^o(自然環境研究センター)・宮下徳子((株)地球工作所)

ワルサワダケヒメハナカミキリ *Pidonia testacea warusawadakensis* は、OHYASHI (1959) により南アルプスの高地から亜種として記載されたものであるが、HAYASHI (1969) を初めその後の研究者により、*P. testacea* ニセフタオビチビハナカミキリの一地域型として扱われて来た。

また、この亜属 *Omphalodera* の分類学的再検討を行った KUBOKI (1979) も同様の扱いとした。

下村 徹氏より、かねてから疑問であったこの扱いについて指摘され、演者らも研究の結果、同氏の報告 (SHIMOMURA (1992): *Elytra*, 20) のとおり *P. testacea* とは別の独立種と判明した。両種は外部形態や雄交尾器が相違する。また現地でも採集調査を行ない、生態的知見も明らかにした。

◇日本鞘翅学会(1993年)◇

〈事務局〉〒169 東京都新宿区百人町3-23-1, 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第一研究室

〈会長〉渡辺泰明(〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1, 東京農業大学昆虫学研究室, tel. 03-5477-2265)

〈副会長〉露木繁雄

〈常任幹事〉岩田隆太郎(庶務), 齊藤明子(会計), 新里達也(*Elytra* 編集), 妹尾俊男(甲虫ニュース編集), 佐藤正孝(渉外), 大木 裕(大会), 久保田正秀(例会), 江本健一(木曜談話会)

〈幹事〉藤田 宏, 林 靖彦, 平野幸彦, 穂積俊文(名古屋支部長), 笠原須磨生, 森本 桂, 中村俊彦, 大林延夫, 遠山雅夫

〈会計監査〉福田惣一, 西川協一

〈*Elytra* 編集委員〉上野俊一(委員長), 森本 桂, 岡島秀治, 高桑正敏, 新里達也

〈入会問合せ先・住所変更連絡先・退会届先・*Elytra* 投稿先〉〒169 東京都新宿区百人町3-23-1, 国立科学博物館分館 動物研究部昆虫第一研究室気付, 日本鞘翅学会宛 (tel. 03-3364-2311, 内線621)

〈甲虫ニュース投稿先〉〒278 千葉県野田市堤台438-32, 久保田正秀宛 (tel. 0471-25-6315)

〈会費振込先〉東京 8-401793 (新入会費 ¥1,000; 一般会員年会費 ¥5,000; 国外会員年会費 ¥8,000; 賛助会員年会費 ¥10,000 以上)

〈鞘翅日学会・甲虫談話会・鞘翅学会の刊行物バックナンバー取扱〉〒973 いわき市内郷郵便局私書箱11号, TTS昆虫図書宛 (tel. 0246-27-2521 / fax. 0246-27-4031)

〈その他問合せ先〉〒154 東京都世田谷区下馬3-34-1, 日本大学農獣医学部林学科, 岩田隆太郎宛

(tel. 03-3421-8121, 内線 385) (8月以降移転予定)
(庶務担当, 岩田隆太郎)

◇甲虫ニュース100号記念の夕べ◇

第4回例会で配布された「甲虫ニュース」第100号の発刊を祝し、例会終了後、恒例の忘年会もかねて午後6:00より、上野池の端の東京弥生会館にて記念パーティーを開催しました。創刊より長く発行にたずさわってこられた黒沢良彦、渡辺泰明両氏の挨拶に続き、旧甲虫談話会創立者の一人でもある遠来の森本 桂氏の乾杯の辞をもって開宴。豊かな酒肴と料理を囲んで賑やかな歓談の夕べとなりました。中頃で、第1号から好評の表紙カットを描き続けておられる木村欣二氏に記念品を贈呈。恒例の文献オークションは次期例会担当の久保田正秀氏が采配をふるって興を添えました。午後8:00、会長の上野俊一氏の挨拶と新井久保氏の音頭による手締めをもって盛会のうちに終了いたしました。



(西山 明撮影)

文献をご提供いただきました穂積俊文、黒沢良彦、境野広行、佐藤正孝、田添京二の各氏、ならびに応札された各位、なにかとご配慮をいただいた東京弥生会館支配人の渡辺啓助氏に御礼申し上げます。

参加者氏名 (ABC 順敬称略)

相場博明, 新井久保, 荒井充朗, 江本健一, 藤田宏, 長谷川 洋, 堀川正美, 井村有希, 岩田隆太郎, 笠原須磨生, 川田一之, 木村欣二, 記野直人, 岸本太郎, 久保田正秀, 黒沢良彦, 益本仁雄, 松本浩一, 宮川澄昭, 森本 桂, 森田誠司, 中村俊彦, 新里達也, 蕪澤幸世, 西山 明, 越智輝雄, 奥田好秀, 奥島雄一, 齊藤明子, 境野広行, 榊原陽一, 佐藤正孝, 佐藤陽路樹, 妹尾俊男, 鈴木和利, 田尾美野留, 田添京二, 土橋秀行, 露木繁雄, 上野俊一, 渡辺泰明, 渡 弘, 吉田篤人。

(例会担当, 笠原須磨生)

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0.1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
振替 東京(3) 21129
電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)
FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

◇会計報告◇

1991年度 決算(1991.1.1.~1991.12.31.)

収 入	予 算	決 算	増 減
前年度繰越金	1,900,000円	1,970,281円	70,281円
会 費	2,300,000	2,468,000	168,000
広 告 費	100,000	40,000	-60,000
出版物売上金	84,000	283,760	199,760
大会会場費	100,000	78,000	-22,000
雑 収 入	0	94,355	94,355
寄 付	0	2,210,000	2,210,000
合 計	4,484,000	7,144,396	2,660,396
支 出	予 算	決 算	増 減
会誌印刷費 (Elytra)	1,600,000円	1,241,538円	-358,462円
(甲虫ニュース)	400,000	438,316	38,316
会誌送料	500,000	581,496	81,496
通 信 費	100,000	162,444	62,444
事 務 費	100,000	67,410	-32,590
大会会場費	30,000	0	-30,000
予 備 費	50,000	0	-50,000
次年度繰越金	1,704,000	4,653,192	2,949,192
合 計	4,484,000	7,144,396	2,660,396

特別会計 1991年度決算

収 入	支 出
前年度繰越金	486,576円
利 息	15,305
出版物売上金	401,660
合 計	903,541
次年度繰越金	903,541
合 計	903,541

(会計担当, 齊藤明子)

日本鞘翅学会

会費(一ケ年)5,000円, 次号は1993年6月下旬発行予定

発行人 渡辺泰明

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1
国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311, 振替 東京8-401793
印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第二地帯 ¥1,500, ¥950, 第三地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25
電話(03) 3811-4547, 振替 6-113479